三宅島の火山活動解説資料（令和８年 10 月）

気 象 庁 地 震 火 山 部
火山監視・警報センター

地震活動や噴煙活動は低調で、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量も極めて少ない状態が続いていますが、山頂火口内[1)]の地熱域では温度や放熱率がわずかに高い状態が認められています。中長期的には、山体深部の膨張を示す地殻変動が続いており、引き続き地下のマグマの蓄積が進んでいると考えられます。

火口内での噴出現象が突発的に発生する可能性がありますので、山頂火口内及び主火孔から 500m 以内では火山灰等の噴出に警戒が必要です。地元自治体等の指示に従って、危険な地域には立ち入らないでください。

噴火予報（噴火警戒レベル１、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

１）山頂火口内とは、雄山山頂にある火口及び火口縁から海岸方向に約 100ｍまでの範囲を示します。

○ 活動概況

・噴煙など表面現象や火口内の状況（図１～３、図４－①～③、図５－①～③、図７）

８日に実施した現地調査では、山頂火口内の主火孔及びその周辺で引き続き弱い噴気や地熱域が観測され、前回観測時や前年同時期と比べても特段の変化はありませんでした。

噴煙活動は低調な状態が続いており、山頂火口内の地形、噴気にも特段の変化は認められません。また、坪田及び神着の監視カメラによる観測で、山頂火口縁を超える噴煙は観測されませんでした。

地熱域についての解析では、山頂火口内の地熱域のうち主火孔周辺（図７中白色枠の合計）で、2022 年以降は、温度や放熱率がそれまでに比べてわずかに高い状態にあります。

山頂火口からの火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は極めて少ない状態が続いています。

・地震や微動の発生状況（図４－④、図５－④～⑥、図６、図８）

火山性地震は少ない状態で経過しました。震源は主に山頂火口直下の深さ１～２km付近に分布し、これまで発生している範囲と比べて特段の変化はありません。火山性微動は観測されませんでした。

・地殻変動の状況（図４－⑤⑥、図５－⑦～⑪、図９）

GNSS 連続観測によると、2006 年頃から山体深部の膨張を示す地殻変動が継続しています。傾斜計では、今期間特段の変化は認められませんでしたが、長期的には 2019 年頃を境に、それまで続いていた傾向に変化がみられます。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。
https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php
次回の火山活動解説資料（令和８年 11 月分）は令和８年 12 月８日に発表する予定です。
資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。
https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokuji.html

この資料は気象庁のほか、国土地理院、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所及び東京都のデータも利用して作成しています。
資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『基盤地図情報』『電子地形図（タイル）』『2 万 5 千分１地形図』『数値地図 25000（行政界・海岸線）』『数値地図 50ｍメッシュ（標高）』を使用しています。



図１　三宅島　雄山山頂部の状況（坪田監視カメラ）

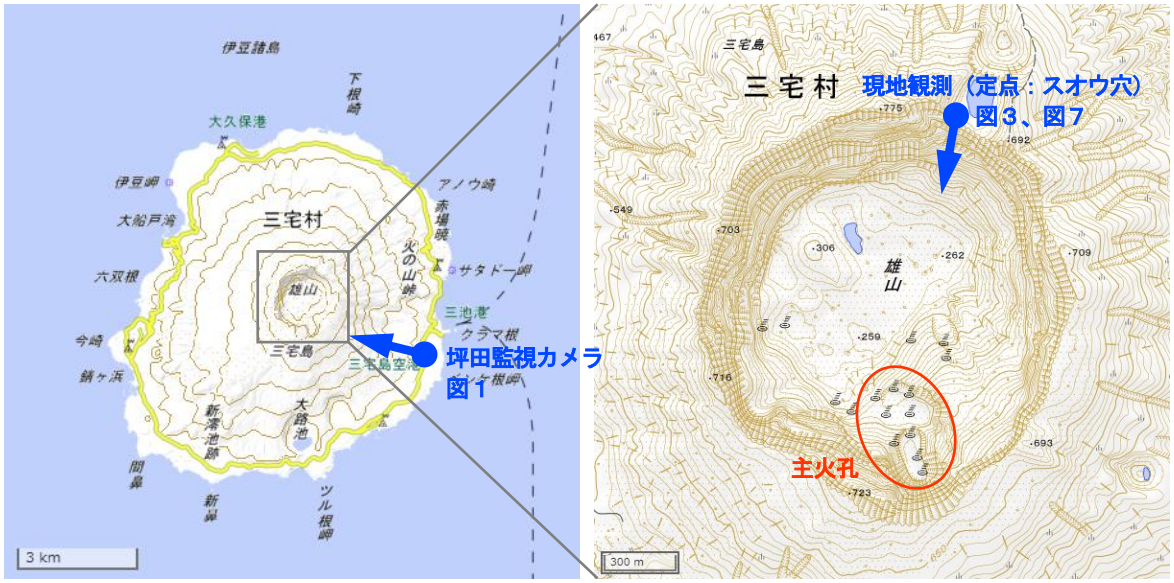


図２　三宅島　掲載画像の撮影位置・方向



図３－①　三宅島　山頂火口内の状況（スオウ穴から撮影）

※　上段、中段、下段はそれぞれ当月、前回（８月）、前年同時期（2025 年９月）の画像です。なお図中の赤点線枠は図３－②の熱赤外画像の範囲を示します。

・８日に実施した現地調査では、高さ約 50ｍの白色の噴煙が観測されました。前回観測（約 100ｍ）や前年同時期（50ｍ）と比べ特段の変化はなく、山頂火口内の地形にも特段の変化は認められません。

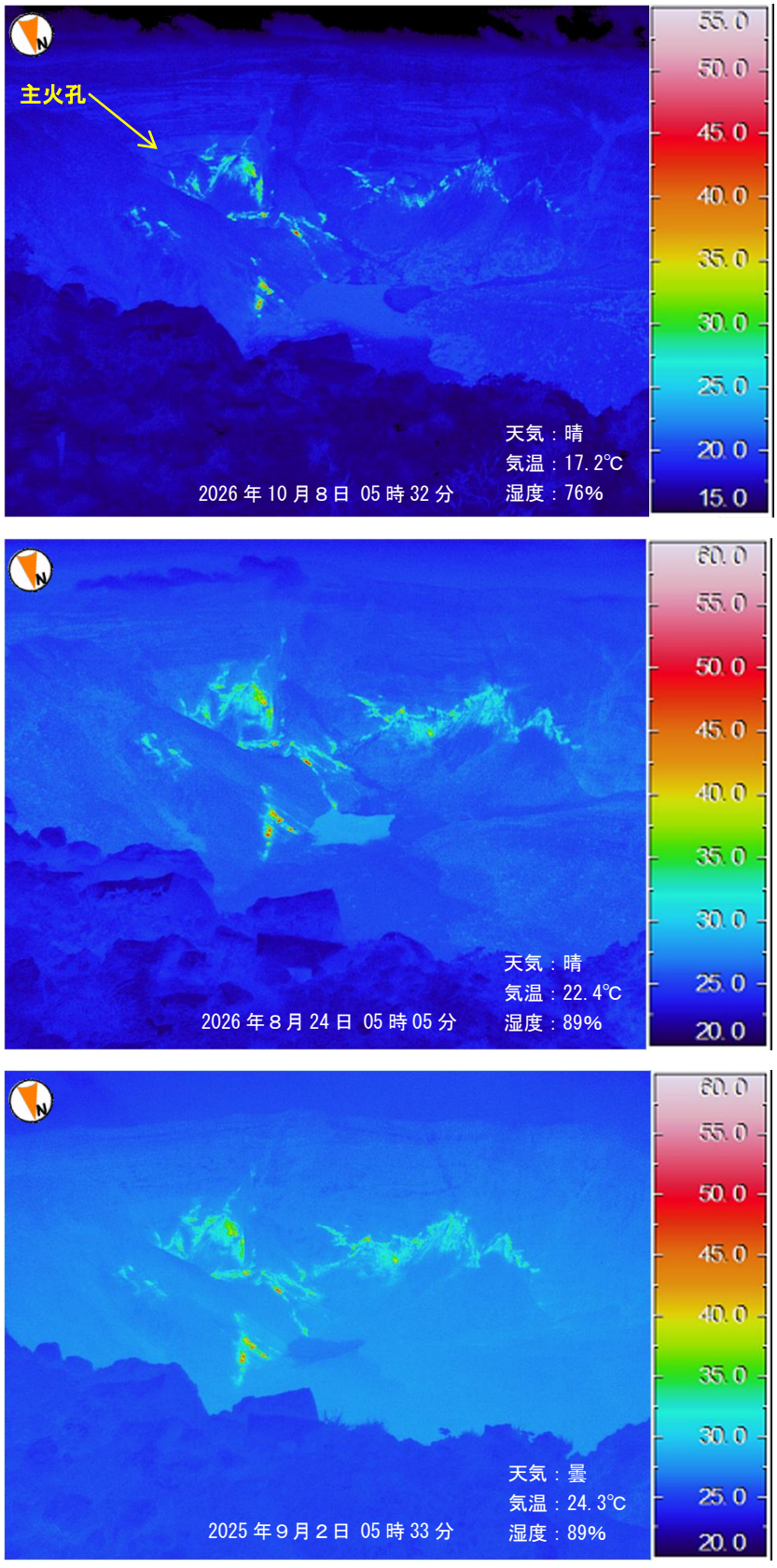


図３－②　三宅島　山頂火口内の地熱域の状況（スオウ穴から撮影）

※　上段、中段、下段はそれぞれ当月、前回（８月）、前年同時期（2025 年９月）の画像です。

・８日に実施した現地調査では、主火孔及びその周辺で引き続き地熱域が観測されました。前回観測や前年同時期と比べて特段の変化は認められません。

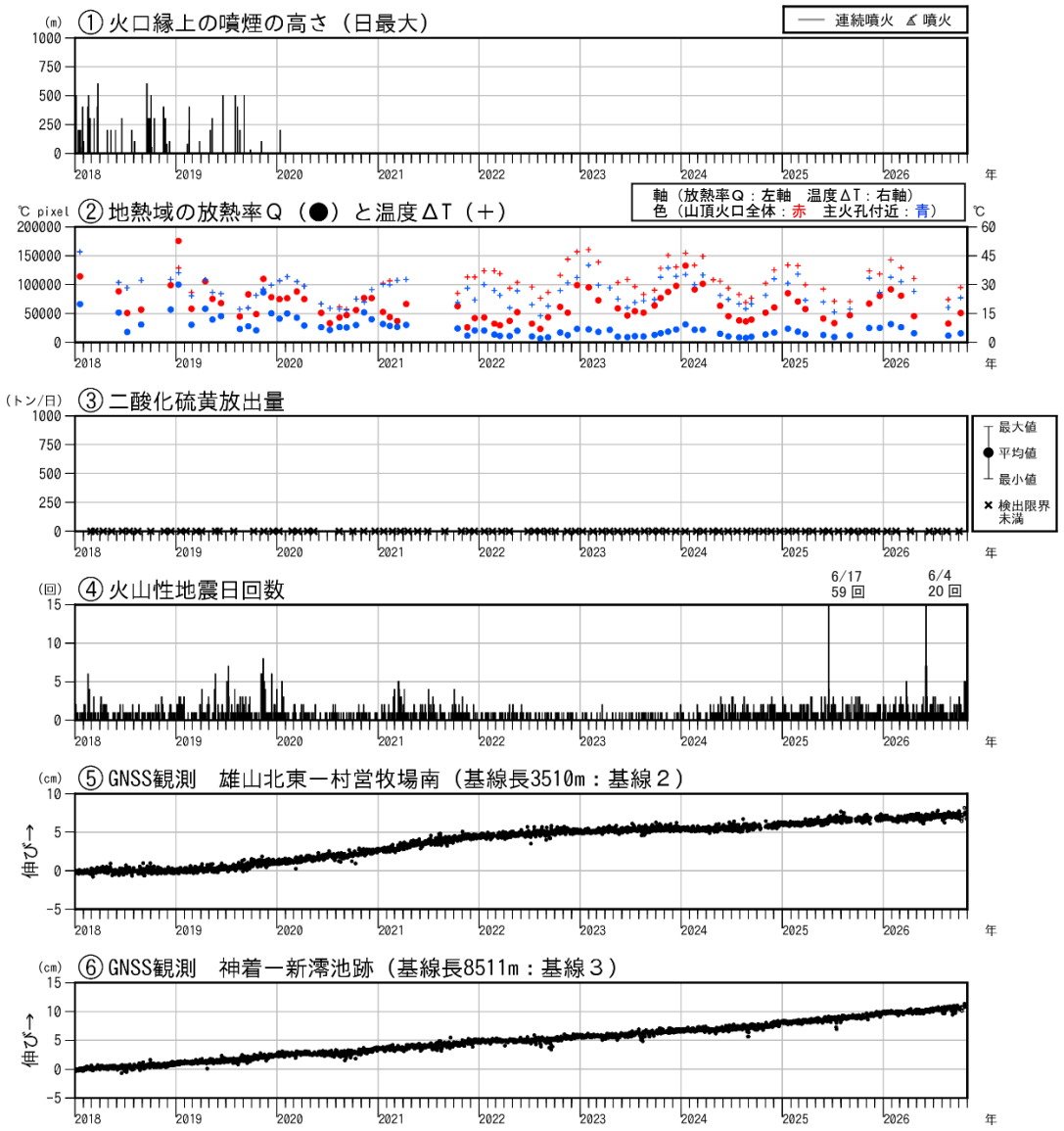


図４　三宅島　火山活動経過図（2018 年１月１日～2026 年 10 月 31 日）

②　ΔT は最高温度と非地熱域温度の差、Qは高温域の画素毎の温度の積算値を示しています。値は赤外熱映像装置での地表面温度の観測によるもの。主火孔付近・周辺の領域については図７を参照。
③　×は数十トン程度以下、もしくは検出限界未満を示します。
④　2024 年４月１日に計数基準を変更しました。
＊火山性地震の計数基準
～2024 年３月：雄山南西の上下動成分で最大振幅 6.0μm/s 以上
2024 年４月～：雄山南西の上下動成分で最大振幅 1.5μm/s 以上

・噴煙活動は、低調な状態が続いており、監視カメラによる観測では 2020 年２月以降に火口縁を超える噴煙は確認されていません（①）。
・地熱域は、山頂火口全体で 2022 年以降、ΔT（温度）やQ（放熱率に相当）がわずかに高い状態となっています。そのうち主火孔周辺（図７中白色枠の合計）の地熱域で前述の傾向がみられていますが、主火孔付近（図７中黄色枠）では特段の変化はみられていません（②）。
・二酸化硫黄放出量は、期間を通して検出限界未満で経過しました（③）。
・山頂火口直下を震源とする火山性地震は、2025 年６月に一時的な増加がみられましたが、今期間は少ない状態で経過しました（④）。
・地殻変動について、2019 年頃からみられていた山体浅部の膨張を示すと考えられる変動は、2023 年以降停滞しています（⑤）。一方で、山体深部の膨張を示す変動は継続しています（⑥）。

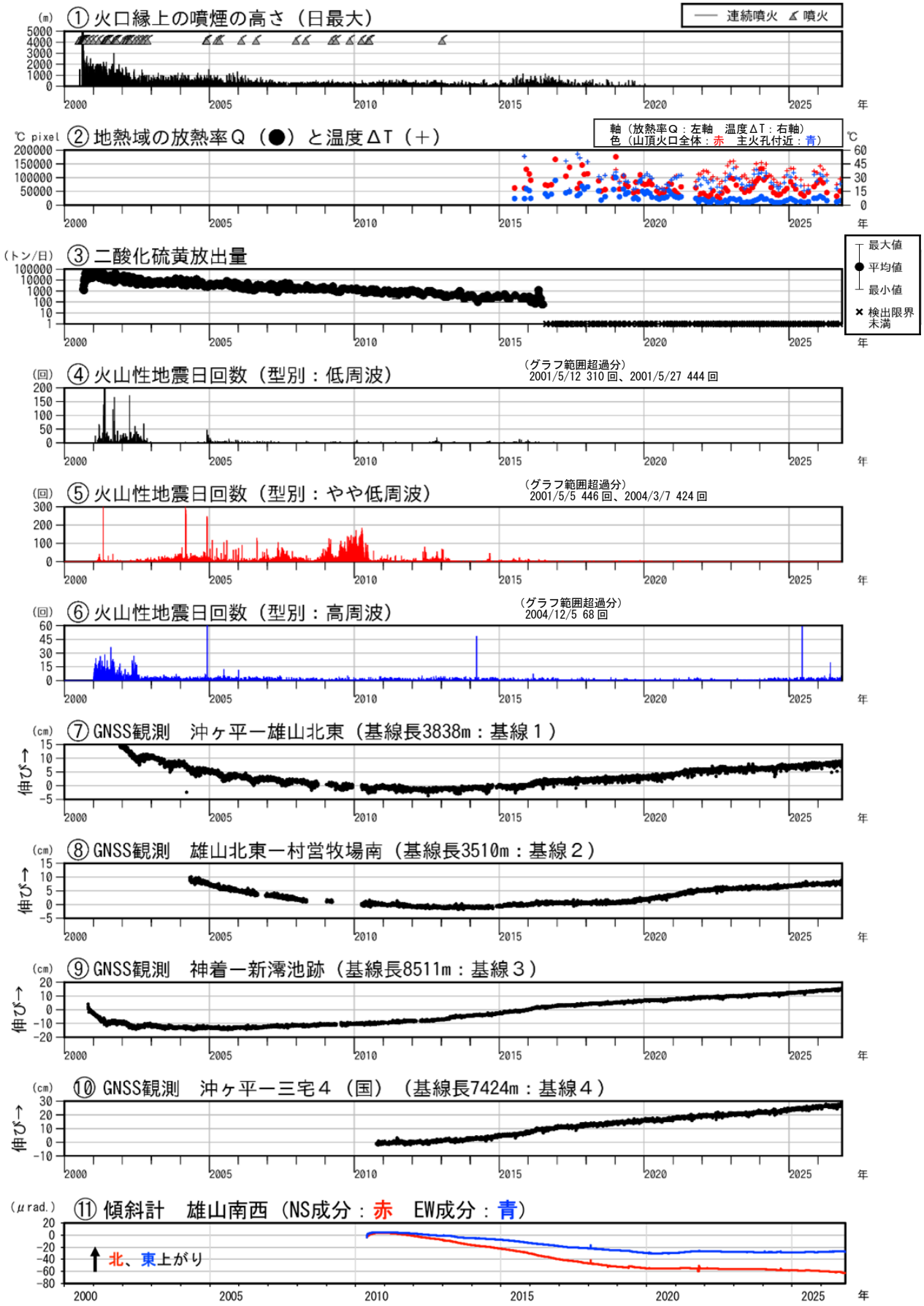


図５　三宅島　長期の火山活動経過図（2000 年１月１日～2026 年 10 月 31 日）

（前ページつづき　図５の説明から）

②　　図４②に同じ。

③　　図４③に同じ。なお、2005 年 11 月まで、海上保安庁、陸上自衛隊、海上自衛隊、航空自衛隊、東京消防庁及び警視庁の協力を得て作成しています。

④～⑥　地震の種類別（図８参照）にデータを掲載しています。計数を開始した 2001 年１月１日からのデータを掲載しています。

＊火山性地震の計数基準
～2012 年７月：雄山北東の上下動成分で最大振幅 12μm/s 以上
2012 年８月～11 月：雄山南西の上下動成分で最大振幅 5.5μm/s 以上
2012 年 12 月～2024 年３月：雄山南西の上下動成分で最大振幅 6.0μm/s 以上
2024 年４月～：図４④に同じ。

⑦～⑩　2010 年 10 月及び 2016 年１月に解析方法を変更しています。グラフの空白部分は欠測を示します。各基線については図９参照。

⑪　　傾斜計は設置深 100m。観測点については図９参照。

※　　（国）が付いている観測点は国土地理院の観測点です。

・GNSS 連続観測において、基線２では、2019 年頃からみられていた山体浅部の膨張を示すと考えられる基線長の伸びの傾向は、2023 年以降停滞しています（⑧）。
・一方で、基線３では 2006 年頃から、基線４では観測を開始した 2010 年 10 月以降から、山体深部の膨張を示す基線長の伸びが継続しています（⑨・⑩）。
・傾斜観測では、2025 年６月の火山性地震の増加に同期して、山頂付近の隆起を示すと考えられる傾斜変動が一時的に認められましたが、その後特段の変化は観測されていません。長期的には、火口方向下がりの傾斜変化が 2020 年頃まで継続していましたが、その後は鈍化しています（⑪）。

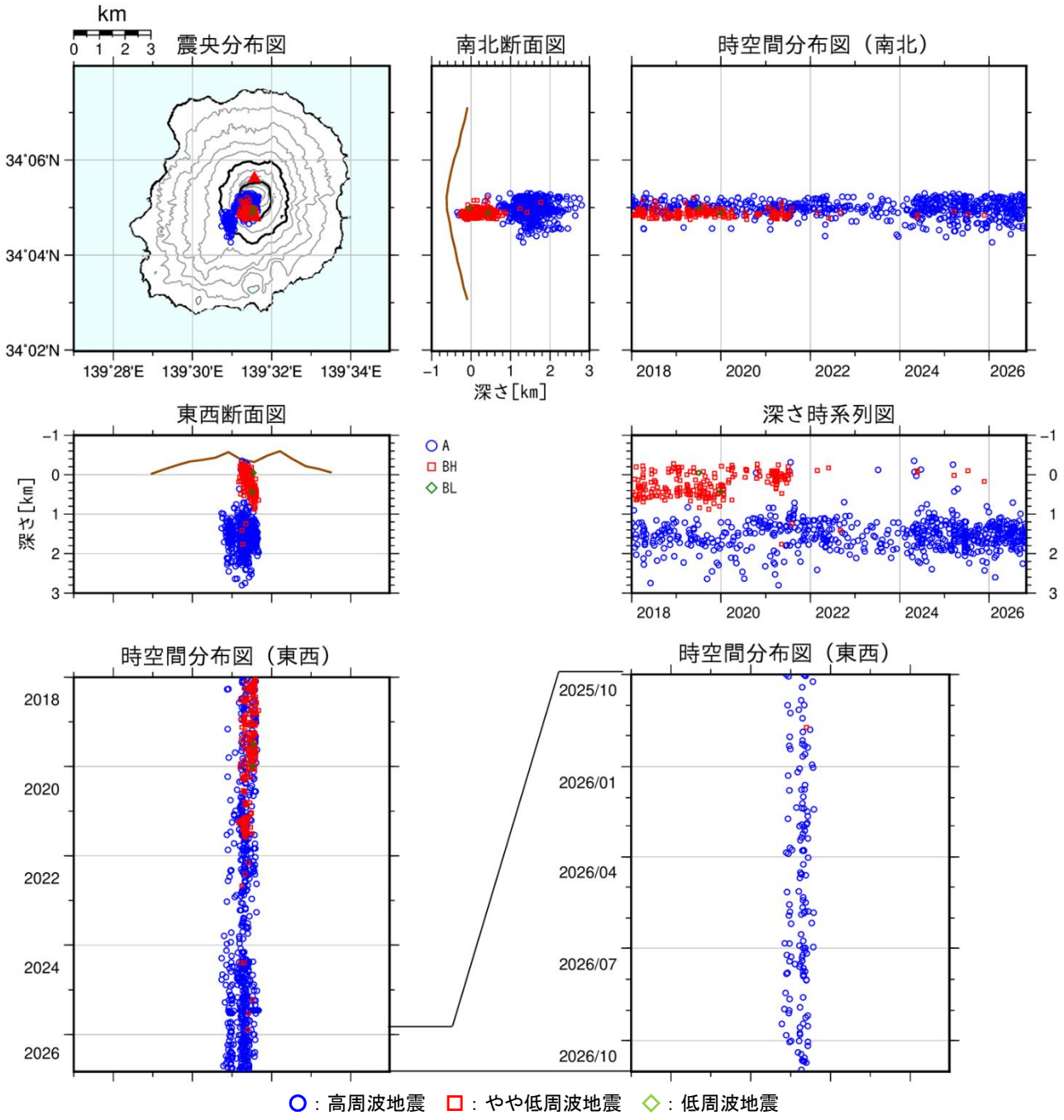


図６　三宅島　震源分布図（2018 年１月１日～2026 年 10 月 31 日）

※　図内右下の時空間分布図（東西）は、2025 年 10 月１日～2026 年 10 月 31 日、の期間の拡大図です。
なお、2024 年４月に地震の計数基準を変更しています（計数基準の変更については図５参照）。

・火山性地震の震源は、主に山頂火口直下深さ１～２km 付近に分布し、これまでと比べて特段の変化は認められません。

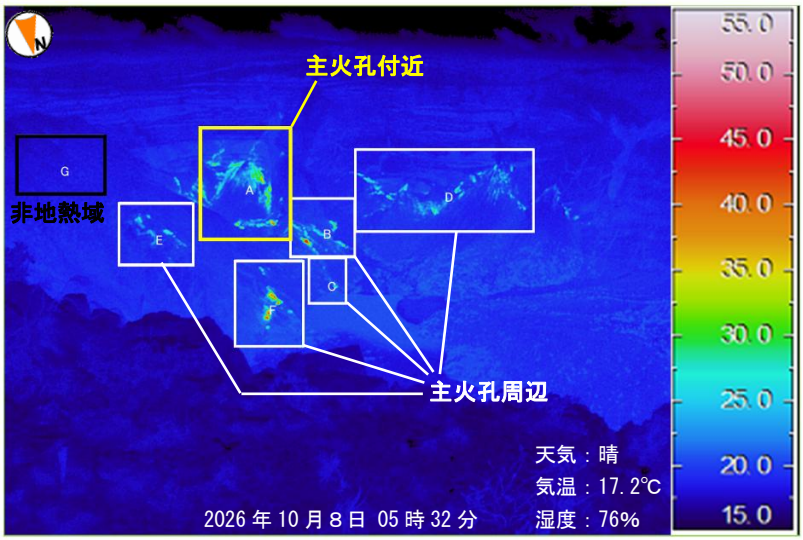


図７　三宅島 山頂火口内地熱域の解析領域

※　現地観測の定点で撮影した山頂火口内の地熱域とその解析領域。黄色枠が主火孔付近、白色枠の合計が主火孔周辺を示します。

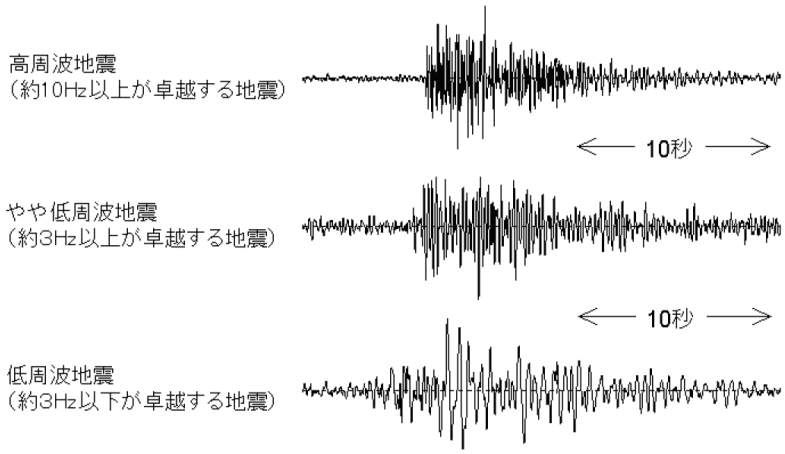
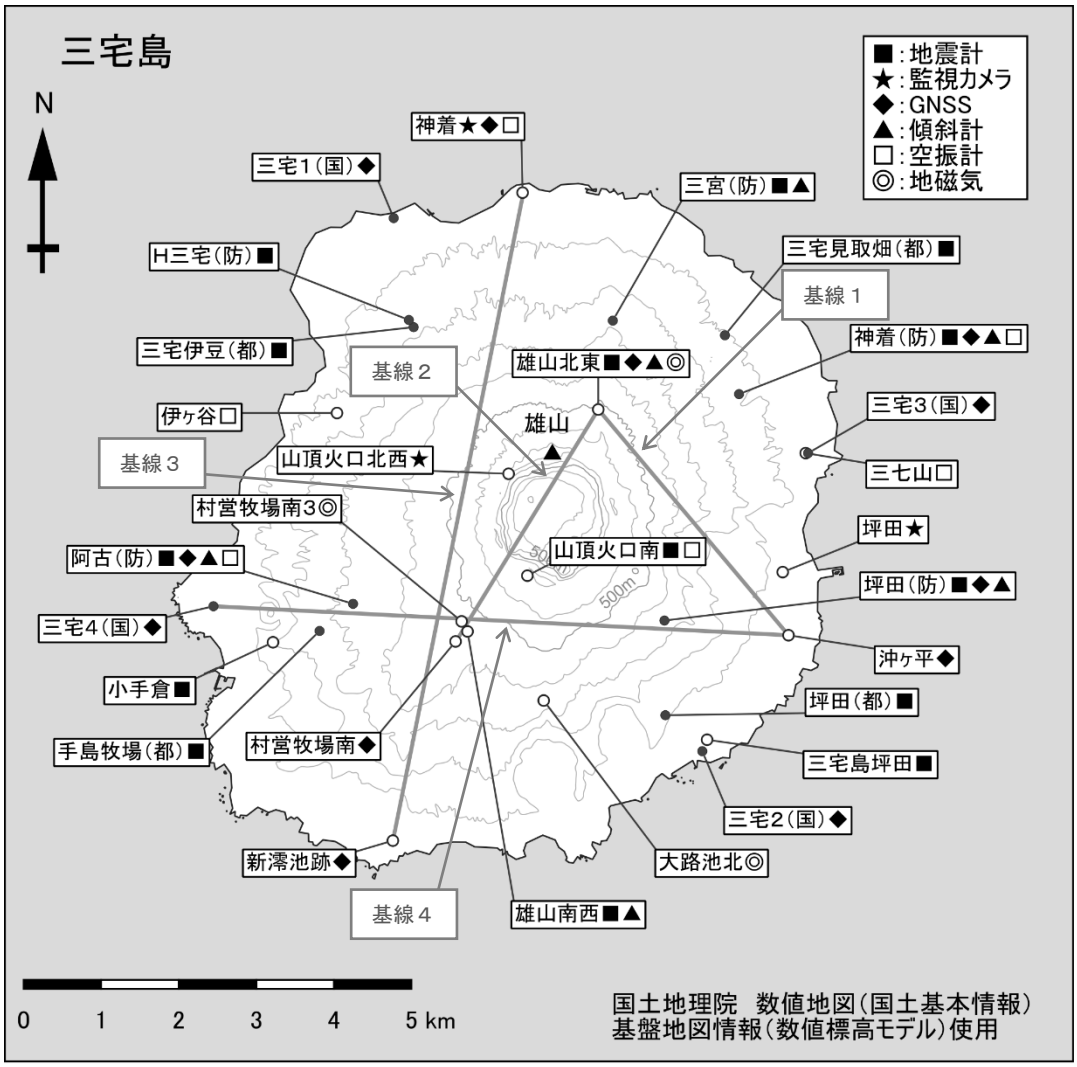


図８　三宅島　主に発生している火山性地震の特徴と波形例



小さな白丸(◯)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
(国):国土地理院、(防):防災科学技術研究所、(都):東京都

図９　三宅島　観測点配置図

※図中の直線は、図４～５の GNSS 基線を示します。